

5 指定施設

身近な移植医療可能

病院などの医療施設が骨髄バンク

を利用して、非血縁者からの骨髄の移植を実施するには、骨髄移植推進財団（日本骨髄バンク）からの指定が必要だ。県内では、県

立医大付属病院小児科が一九九三（平成五）年に指定され、同医大の第一内科が一昨年に指定となっ

た。指定になれば、身近な施設で移植医療を受けられるという大きな利点がある。同小児科では九五（同七）年に初めて、骨髄バンクを経由した非血縁者間での骨髄移植を実施。以来、昨年暮れまでに九件の骨髄移植を行った。血縁者間の骨髄移植開始は九〇（同二）年と早く、これまでに十九件に及ぶ。

「小児の場合、成人に比べて移植を必要とする例は全体の二〇―三〇％だが、登録して長い間、HLA（白血球の型）一致者が見つからない場合もあるし、一人で何人も見つかる例もある。骨髄移植以外にもいくつか造血幹細胞移植の種類があり、それぞれ長所短所があるので、病気や病状に応じてもよりよい方法を選んで」と菊

田敦医師。

福島市の小学生はドナーからの骨髄移植を受けて数年がたった。バンクに登録して一年後に移植。

このあと四十代の母親が無菌ベッドのわきで寝泊まりして子どもと

過ごした。「移植のときは、うまくいくといいなと願っていました。

これまでの経過も順調で、運動もできます」と母親は涙を浮かべて振り返る。

会津地方に住む小学生も二年前

にドナーからの骨髄を移植した。「登録してからわずか半年で移植。運がよかった。移植の間は「これでよくなれば」と願う心境だった」と四十代の両親は語る。

二人とも県立医大小児科で移植したが「看護婦さんのほかに患者さんが入院中に通う院内学校の先生らの協力があつてこそ治療です」と菊田医師。

院内学校というのは、県立須賀川養護学校医大分校のこと。小児科や



長期入院の児童・生徒は須賀川養護学校医大分校の院内学校で学ぶ

基準見直しの動き医師間にジレンマ

整形外科などに入・通院している児童・生徒が対象だ。年間約八十人が学ぶ。教職員は十八人。

「健康回復が第一。主治医の先生と相談して授業内容を決めます。生徒たちも自分なりに理解して病気に立ち向かいますし、ここで将来の進路を見いだす子もいます」と石川福子分科長。退院する児童・生徒は拍手で送るが、つらい結果に心が乱れることもある。

第一内科では、一昨年の指定を受け、昨年に初めて非血縁者間での移植に成功した。「成人移植の場合、ドナーは五十歳までという制限があり、移植希望者の両親の多くは該当しない。最近兄弟も少ないので、バンク頼りということになる」と七島勉医師。

かつて、移植指定を受けるには年間五例の実施例を満たす必要があった。この基準に戻して各科ごとに指定する動きもあり、満たさなければ指定から外れる事態も考えられる。同第一内科での実施は三例。ドナーが足りないなどの課題のなかでどう移植を進めるのか。医師の間にはジレンマが残る。